

アンヘラス大学で災害医療の特別講義を行いました（2019/1/12）

テーマ：健康で災害に強い社会をつくるには

会場：Angeles University Foundation, School of Public Health（Angeles, フィリピン）

2019年1月12日（土）にフィリピンのアンヘラス大学大学院公衆衛生学専攻で、当研究所災害医学研究部門の江川新一教授が特別講義を行いました。

この講義は災害科学国際研究所と部局間学術交流協定を結んでいるアンヘラス大学において、災害医療についての講義要請に応じて5年前から行っているものです。聴講者は、保健師、助産師などすでに実務経験のある社会人修士学生と、公衆衛生学専攻や教育学専攻の教員であり、災害医療の基礎知識と研究について、アンサーパッドを用いた双方向性の授業を行いました。

江川新一教授は、災害のリスク＝ハザード（ハザードへの曝露）×脆弱性／対応能力という簡単な式を用いて仙台防災枠組の基本構造である“リスクを知る”、“リスクを減らす”、“行動できるように備える”ことについて説明しました。このように考えることで複雑に見える災害のリスクも、病気に対する予防や治療、再発予防などと同様に低減させることだと理解することができます。

また、後半部分では、2014年に西アフリカで大流行したエボラウイルス感染症、いまだに効果的な治療法が確立されていない疾患に対して、保健医療従事者の教育の重要性と、エージェント型シミュレーションモデルを用いた社会の“記憶”時間の違いが被害に与える影響について説明しました。災害をひきおこすハザードとなる微生物に対する曝露を適切な方法で低減、予防すること、そのためには保健医療従事者の教育、個人防護資材(Personal Protective Equipment: PPE)とともに、一般市民の“記憶”を長持ちさせることで、災害の被害を低減させることができます。

リスクに対する考え方は、東日本大震災で起きた放射線災害や西アフリカでのエボラウイルスに対する考え方とも共通します。ただむやみと恐れるのではなく、リスクをきたすものの性質を理解し、リスクに対する適切な管理（予防）を行い、適切な行動（対応）をとることで、解決への道筋が見えてきます。講義に対する評価も最後にアンサーパッドを用いて行われ、聴講者の約68%がとても面白かった、24%が面白かった（合計92%）との高い評価を得ました。



災害医療、災害感染症に関して
講義する江川新一教授



アンサーパッドを用いた講義に熱心に
参加する公衆衛生学専攻の大学院生と教官

文責：江川新一（災害医学研究部門）